

『LOAFAG』の制作にあたり協力していただいた全ての皆様に、
この場を借りて心からの感謝を申し上げます。
ありがとうございました。

O A F A G



Vo.1

はじめに

原子爆弾が広島・長崎に投下されてから65年が経ちました。

今でも私の祖母は癌などの被爆症に悩まされ、闘病生活を続けています。そんな生活を送っている祖母の姿を見ながら、「まだ原爆の被害は続いている、いや、その被害は二世、三世へと受け継げられ永遠に続いていくのではないか」と思うようになりました。大学進学をきっかけに、さらにその想いは強くなりました。「被爆地以外では原爆に対する知識はとても浅い。このままでは原爆や核兵器の悲惨な記憶が廃れて、また新たに同じような被害を受ける人々が出てくるのではないか」そう感じるようになったのです。このたびプロジェクト研究という授業を通じて、世界のどこかで戦争や核兵器の使用といった大きな過ちが繰り返されぬよう、そして地球上から無くなるようにと願うメンバーが集まりOAFAGという団体を設立するに至りました。戦争を知らない世代にとって、原爆や戦争はすでに過去のものになっていますが、原子爆弾投下の被害を目の当たりにした人々は、今も同じこの時を生きています。65年経った今でも原爆症によって苦しむ人々がたくさんいること、そして、この瞬間にも命を失っている人々がいること。そのことをひとりでも多くの人々に知ってもらいたいと思い、私たちはこの本を製作することにしました。

原爆の被害は終わっていない。

原爆の被害は今も続いている。

原子爆弾が投下されたという事実、その被害についての事実をそのまま伝えること。

原爆を知らない私たちだからこそできることだと思います。

目次

1. はじめに
2. Q&A
3. OAFAG interview
 - interview1
 - interview2
 - interview3
 - interview4
 - interview5
4. コラム
5. おわりに

Question .5 私たちとどこか違うの？

Answer5. 違いはありません。しかし科学的根拠はありませんが、遺伝的に健康障害や身体異常が出やすいと言われています。

Question .6 被爆二世と胎内被爆者の 違いって？

Answer6. 胎内被爆者とは、母親のお腹の中で被爆した人のことです。一方、被爆二世は前述のとおり被爆者の子供なので、実際に被爆したわけではありません。

Question .7 国はどのような対応をしてるの？

Answer7. 法律に基づき、所定の要件を満たした人には被爆者健康手帳が配られます。これを見せることによって、診察費・入院費などの医療費が無料になります。

Question .8 今現在どういう問題があるの？

Answer8. 在外被爆者、被爆二世三世への保障の充実などが国に求められています。また、時代の移り変わりと共に被爆の記憶や平和への意識が薄れていくという懸念もあります。

Question .1 被爆者って？

Answer1. 核爆弾の放射線を浴びた人。本書では、第二次世界大戦時に広島及び長崎で原子爆弾の被害を受けた人のことを指します。

Question .2 どれくらいの被害があったの？

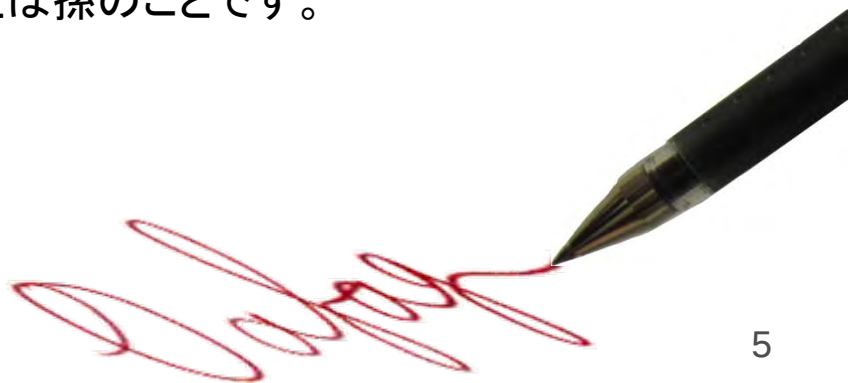
Answer2. 広島市約14万人、長崎市約7万人が亡くなったと言われています。その規模は在外被爆者、被爆二世三世を含めれば計り知れず、正確な人数は分かりません。

Question .3 在外被爆者って？

Answer3. 原爆投下の際、広島市・長崎市で被爆し、現在国外にいる外国人の方です。

Question .4 被爆二世・三世って？

Answer4. 被爆者の子供または孫のことです。



言う人がいる。確かに交通事故で亡くなったけれども、それまでに苦しんでいるじゃない、差別とかで。そういう心理的なものを日本人はないがしろにする。苦しいよ、トラウマっていうのはね、当時の匂いがよみがえってきたりね。匂いがよみがえってきたりね。

—— 三登さんが、被爆に関する
ことで差別などをされたことはあり
ますか

幸福なことに私自身は一切ない。私の知り合いは10年前東京に行ってね、たまたま病気になったのよ。原爆症を初めて見た医者だったらしく、スタッフ全員を呼んで「これが原爆の人よ」と言ったそう。見世物のようでものすごく腹がたつたらしい。それだけ広島の人たちとは原爆に対する意識が違うのよ。今でもそんなもんよ。

「一番見逃されるのが、 心の問題。」

—— ご自身が、胎内被爆というこ
とに対して嫌悪感を持ったことはあり
ますか

嫌だなあというか、病気がちだったからね。嫌は嫌だけでも、その分だけ原爆に対する意識がある。絶対にいけない。だからまあ、人から見たら私はちよっと変っているよね。まったく休まずこの原爆ドームの前に4年間おるわけでしょ。そんな人広島にいないから。なんでそこまでするのかというと、知ってほしいという気持ちからだよね。私自身はそこまで大変なことをしているとは思ってない。自分ができていることをやっている、毎日。

—— そういう活動をしようと思っ
たきっかけは何ですか

知らない人が多いから。知ろうとして来ても、原爆のこと、被爆者の想いを知るサービスがないから。そして、なるべくたくさんの人に知ってほしい。たとえばね、最初の1年は2,000人しか案内することができなかった。1組あたり2時間、多い時は4時間くらい案内していたのだが、それではあまりにも人数が少なすぎる。いろいろ考え

て、あっちこっち行かないでも、こういう資料を整えればこども話ができる。原爆ドームの前に立って話をしたり。多いときは10人くらい集まることもあった。それから、12月の29日からが一番多いね、資料館が閉館だったことを何も知らずに来るから。で、がっかりするんだ。だから私のところに話を聞きにくるね。今は1年間で2〜3万人。今まで案内した人数は7万6,000人。みんなね、広島を知りたいからここに来る。それに応じるべきでしょ。



三登 浩成

MITO KOSEI

OAFAG interview1

原爆ドーム前でフリーガイドとしてほぼ毎日活動している、三登浩成さん。
母は市内にて被爆し、「胎内被爆者」として広島に生まれる。

「平和は与えられるものではないから、
維持するためには大変な努力が必要なんだ。」

—— 現在、被爆症のようなものはありますか

特別なものはないが、小学校までは免疫力が低下して、病氣ばかり。今日もね、70歳近い被爆者に会ったんだけど、今でも白血球が少なく免疫力が弱くて病氣してばかりだそう。免疫力が弱い人が多いよ。私のように体内被曝の場合はまだわからないね。癌になっても、それが原爆によるものなのかはまだわからない。立証されないでしょ。

原爆症認定書というのがあるんだけど、手帳とは関係ないよ。すべての病氣に対して治療費が無料なのが手帳。認定書をもっているのは1%。つまり、ほとんど制度があっても意味がない、ということ。集団訴訟が起きた。訴訟は勝ったけれども、また問題は起こった。基準が緩和されたことで、7000〜8000人が私も該当するといって申請したら、査定が間に合わなくて、拒否するときは全く理由を言わずに拒否される。「該当されません」だけ。

—— 被爆者（胎内被爆）であることで、結婚など、生活に何か支障はありますか

今はない。私の場合、結婚相手は県内出身であつたので、とくにはなかった。県外だったらあつたと思うよ。今でもありますよ。県外では新聞なんかにも書いていないし、知る機会がないからね。やはり、広島市にいたら被爆者が身近にいるし、どのようなものなのか自然に分かるだろう。わざわざ被爆者と結婚することないでしょ。よくわからないからなおさらね。本人はよくても親が反対すると思う。

最近広島市でね、これ（手帳）をもっているために高齢者が差別されるということがおこっている。医療費がこれを持っていたら無料でしょ、だから嫌味を言われる。あんたは被爆者だから無料だって。むしろ思いやりがほしいよね、被爆者は苦労したのだから。一番見逃されるのがね、被爆者の心の問題。トラウマとか差別とか。被爆原爆死没者名簿の中には、被爆者であっても、交通事故で亡くなった人もいる。交通事故で死んで、なんで名簿に載せるんだって

宮角 孝雄

MIYAKAKU TAKAO

被爆二世として、広島県に生まれる。
 大学卒業後は専門学校で写真を学び、プロのカメラマンとして活躍。
 1988年にスタジオ宮角を設立し、ライフワークでは平和をテーマに撮影をしている。



2010年宮角孝雄写真集
 「GROUND ZERO 希望の神話」より

—— 自分が被爆二世ということ
 をいつ知りましたか

小学生の時から祖父母や母が被爆
 したという話を聞いていたので、そ
 れを聞いて自分は被爆二世なのかと
 漠然とわかるようになり、そのまま
 現在に至ります。

—— 両親らが被爆された体験
 談を聞かせて下さい

被爆場所からいいいますと、父と義
 理の母は広島駅で被爆しております。
 母は、電車の中で。広島駅は爆心地
 から1900mくらいのところ、母
 のいた車両は爆心地から700mく
 らいのところでした。母の方は、電
 車がもうひとつの電車の影になっ
 たのと、満員電車の中で立っていたも
 のですから、助かりました。周りの
 人はほとんどだめで、片方の電車は
 全滅。こちらの電車は、母と2、3
 人しか助からなかったそうです。父
 の方は、祖父と一緒に広島駅に行っ
 ています。祖父はカウンターのと
 ころで駅員さんと話していて、すべ

—— 三登さんが、こういった活動をしていく中で、何が必要だと感じますか

とにかく、なるべく多くの人が原爆の実証を知ることです。それ以外にない。あったことを知らなきゃ意味ないよね。抽象的な概念では何も人間は動かない。理性と感情が両方ともびったり合ったら動くけれども、理性だけではわからないよね。

感情だけでも具体的に何をやっていかかわらないでしょ。これがびったり合った時に行動できる。そのために「怒り」というのもやっぱり必要だよ。怒りがないと、エネルギーにならない。

—— 三登さんにとって、平和とはなんですか

自分の人権を守りながら、すべて自由に——人に迷惑かけず、喧嘩もせず、が一番大事でしょ。平和があるから、なんでもできる。平和がなかったら、いろんなことが制限されて、満足な人生を送れないよね。飢えとかいろんな問題もあるけど平和が一番大事ですよ。平和＝人間として生きられる状況を備える、ということが大事だよ。個人個人が満

足のいく生活ができる状況をね。まずは自分が努力しなければならぬ、平和は与えられるものではないから維持するためには、大変な努力が必要だと思えますよ。それをひとつごとのように、自分の責任ではないと他人に押し付けるのはダメだと思えますよ。何かできることがあるはずだからね。

—— 最後に、メッセージをお聞かせ下さい

世の中で何が起きているのかをきちんと知って、それはなぜかというのを考えて。自分にできることはいくらかあるはずなのよね、小さいことでも。それはやっぱり、あらゆる事象に目を向けて、関心を持つことですよ。日本は自由に情報が得られるからね、テレビや新聞にもさまざまなニュースが流れるから。今の若い人は視野狭すぎるね。それで自分は社会を変えられないと思っているけれども、社会を変えるのは一人一人。それが結集したらすごい力になるでしょ。一人一人の力は小さいと思うたら間違いだと思うよ。人を動かせる力があるかもしれないしね。私がここまでやってきたのはね、良



いと思ったことは毎日続けてやる、休まない、いいかげんだと思われたくないから。実行すれば、思いもよらない良い結果が出るかもしれない。とにかくやってみること。周囲からは、なぜあの人はあんなに必死にしているのだろうと言われるが、私は全然必死ではない。やりたいことをやっているだけ。だから続けられる。それが必死に見えるだけ。必至なだけではないよね。

—— 被爆二世だからこそ訴えたいメッセージはありますか
ドームの前で被爆された一世の方を撮りたいと考えているから、二世や三世が彼らの経験ですね。それで、まあ知人とか新聞社の方にも協力していただいて、「一世の方で写真を残したい方は、写真家の宮角という方がいるのでドームの前に行ってください」と言っ

もらっています。ただ、一世の方は高齢になられて、一人で来られない場合も多い。ですから、二世や三世が彼らの経験を伝えていかねばならないなあと感じます。大きな使命感を抱いてやらなければならないです。

—— 被爆二世だからこそ、理解できる平和について教えていただけますか

戦場に行き、戦争に使われた核とか、爆弾や兵器などで壊れてしまったものを撮って訴えることもできます。世界各国いろんな人種を映しながら、瞑想した人の顔ってどんなだろう、と思った。できるだけ多くの人に見ていただき、平和について考えていただきたい。つまり、ジョン・レノンの言う「愛（ラブ）」。

愛についてどう思いますかというアンケートの答えを見て、平和は「愛」だと理解しました。愛がないと平和も実現しません。平和がないと、憎しみと無関心が生じます。平和、他者への責任、愛、この3つの言葉は本当に人を、「心ある」存在に変えます。人間にとって愛は生きていくうえでのベース、人生のすべてなんだと思う。

—— 宮角さんにとって、平和と愛は同義語ということでしょうか

そうですね、愛＝平和。戦争のよいうな特殊な状況ではなくても、私たちの日常に潜むおそろしさ、いじめ、無視。それもまた「平和」の対極にある。つまり「愛」に満たされない日々がある。まず母親の愛がすべてだと思いますね。理想としては、母親の愛ですね。



にカウンターの前に隠れたのでほとんど無償でした。父は祖父の2、3m後ろに立っていたのですが、天井が全部落ちて下敷きになり、行方不明になりました。でも半月後にリヤカーで帰ってきました。その時はもう投爆から2週間以上経っていて、戦争も終わっていました。8月15日が終戦ですからね。行方不明になっ
てから日にちが経っているんで、お葬式を出したらどうかということになり、その準備をしているときに父が帰ってきたのです。たまたま、全身が傷だらけで重症状態、顔も体も包帯が巻かれて。

なんか人間の運命の不思議さを感じます。ちょっとしたことで、ものすごく運命が変わる、っていうのがありますね。原爆の時なんか特にそうだと思います。ちょっとした時間のいたずら、5分のズレが明暗を分けるようなことってあるんですよ。

——— **どんな時に自分は被爆二世だと再認識しますか**

やはり結婚の時ですね。最初の妻は亡くなり、その後私は47歳で再婚したんですけれども、最初の結婚の

ときは被爆二世ということで私も妻も悩みましたね。子どもができたらどうなるのだろう、と考えて親もちょっと心配していて、切実に悩みましたね。それでも結婚したのですが、子供が3人生まれました。長男は事故で亡くしましたが、次男と娘がおります。次男の方はすごく腕白で、幼稚園の先生にいつも呼ばれて「精神的にちょっとおかしいんじゃないか」と言われるほど。僕はそんなに腕白じゃなかったし、被爆の影響だろうかと考えてしまうこともありました。被爆二世の女性の友人は群馬の人と結婚するときに、彼の家に行き、そこで広島出身だと答えたら、「じゃあ被爆しておられますか？」と聞かれ、『被爆していますよ。』と答えたら、何か問題はな
いのかと言われすごくショックを受けていました。これは傷つきますよね。原爆症については説明されていない部分が多いので、そう言われて、どんなふうになるかわからないと答えるわけにもいけません。今のところ何ともないと言いながらも不安感が残りますよね。

「人間ってやっぱり、愛がすべてなんじゃないかな。
理想としては、母親の愛ですね。」

——— **核兵器の保有についてはどう思いますか**

やはり、核兵器は廃絶しなければならぬということを前提に考えるべきでしょう。地球を滅亡に導くような核は、絶対に廃絶してもらいたいですね。絶対に持たせない。つく
らせない。力で抑え込むことを正当化してはならない。30代ぐらいの働き盛りの人と話していると、日本はやはり強い軍隊を持つべきだとか、日本が国力を増やすために、経済力をもつためには、戦争はいとわれないと考える人がけっこういることに驚いた。先日、新宿の小さいお店で写真展をやった時も、訪れた人の中に、日本も国力で負けちゃいけないから軍隊を強くしなければならぬ、というようなことを話しておられる方がたくさんいてにびっくりしましたね。日本人の多くが痛みを忘れかけている今が、本当に危ないのではないかと思いましたね。

やいた。その時の光景は明確に覚えている。私は爆心地から約1kmのところまで被爆しました。よく生きていられたなと思います。まあ、今は癌を発症していますがね。次の原爆被害者を出さないように、被爆者に対する保障をしろと訴える運動をしている。原爆で家族を失った自分たちが率先して行動しなければならな
いと思っている。それができない人
たちや爆死された方々の意思も汲んでいかなければならない。核兵器を使うということは国際法違反という
だけでなく、人間はもちろん、地域
社会・自然社会をも破壊してしまう。
自然環境を変えてしまつた。

私が被爆したときは蝉しぐれが、やかましいくらいだった。とても暑い
日で、工場が休みだったので、屋から川に泳ぎに行こうかと思っていたら、一瞬にして蝉の声はもうろっ

すべての音が完全になくなった。そして次に聞こえた最初の声は「おかあさん！」という自分の声だった。そういう記憶は明確に残っている。自分が死ぬことさえわからず死んで
いつてしまった人々は沢山いる。自分
は爆風によって斜めから地面にたたきつけられた。被爆者はもちろん
後から広島入りした人、救援にきた
人、さまざまな形ではあるが原爆は
多くの人々に被害を与えた。

癌の発症について詳しくお聞かせ下さい

僕の場合は遅かったですよ。平成8年に最初の皮膚癌を2つ見つけ、その後またあらたに1つ。そして2005年にも、前立腺の中に4、5か所。下手に手術すると転移してしまつので、薬物治療をしています。そのほかに、原爆による白内障、これは手術をして今は治りました。

けれど、原爆白内障の可能性があると
して裁判をしています。まあそれ以前
にも多くの病気になりました。この前
の裁判のときに、医者が言っていたの
は「被爆者には一定のパターン、これ
が被爆者だというものがあるのでは
ない。普通の生活を、普通の人たちと
同じように暮らしている。しかし、被爆
をしているから、普通の人以上に病
気が出てくる」というもので、ああす
こいことを言っているなと感じました。

出やすい傾向はあるけれど、必ずしもそれが原因だと言いきれるものではありません。二世や三世の中で白血病で死んでいる人は沢山いるんですよ。しかし、それが親や祖父母の被爆のせいであるということは証明されてないんですよ、いやしてこなかったんです。そういう取り組みをしてきていなかったのに今になってしようとしても、すでに多数の人が死んでしまいましたからね。症例が少ないからと言われますが、冗談いうなと思って思いますよね。

一番初めに聞こえたのは、

「おかあさん！」という自分の声だった。



OAFAG interview3

岩佐 幹三

IWASA MIKISO

16歳のときに広島にて被爆。
現在は、被爆症とたたかいながら日本被団協の事務局
次長として活動中。

—— 原爆の当時のことについて強く記憶されていることはありますか

当時中学四年を卒業した後工場に動員されていたので、学校には通っていません。今考えれば、完全に洗脳されていたとは思えないが、命中されて撃沈されることやロケット砲のころなど全く頭になかった。だから、日本とアメリカの技術力の差なんて知らなかった。こっそり見ていた映画や、自分の働いた工場などが軍事産業の実態だと思っていました、連戦連勝の情報しかなかった。完全に情報操作されていた。勝っていたはずなのになぜ負けたのかわからなかった。当時の状況は狂気の沙汰というほかない。戦争とは戦って勝つものだという意識しなかった。若者のエネルギーもまた戦争に向けて発散されていた。

—— 原爆とは無縁の中で生活している我々に、何か伝えたいことはありますか

日本国民は戦争を反省する時期がほとんどなかった。沢山の人の父や兄が戦争で死に、彼らは靖国神社に厳かに祀ったので、無駄死にはなかったと国に思いこまされた。それに対して反発もなかった。今になって、東京大空襲の被害者の方々が裁判を起こされている。あの戦争によって多くの国民の生活が破壊された。原爆というものは大量殺りく行為の終着点だと認識しています。

やはり原爆は、人類史上最大の被害。放射線や熱線、爆風が街と人々を一瞬にして破壊した。原子力は発電に使われているが、戦争に使われると、本当に人類を滅亡させてしまうものだと感じた。ただ、原爆投下の瞬間、私の記憶は一時途絶えた。

原爆が落ちて、自分の家の裏にある防火水槽に逃げていたら、とある大学の教授が「これは原子爆弾じゃないかなあ」とつぶ

被爆二世として広島に生まれる。

現在、アルク社にてENGLISH JOURNAL編集部編集長として活躍中。

—— 被爆二世であることを、いつ知りましたか

まだ被爆二世という言葉自体知らなかった頃、広島で原爆に関する授業を受けました。厳密には覚えていないのですが、母が8月6日にこういう事があったのよねと話してくれていました。おそらく小学生低学年のころではないかと思います。そのうちに被爆二世という言葉が使われだしたと記憶しています。広島では医療の補助など被爆二世は別の枠組があり、この中に自分も含まれるんだなと思いました。そんなふうに、ごく自然に自分の置かれている状況を理解するようになりました。

—— 被爆二世であることに嫌悪感を覚えたことはありませんか

それはないですね。私の母は広島 of 草津というところに疎開しており、広島市に向う準備をしているときに被爆をしました。防空壕に逃げているときに「これはこの世の終わりの

か」と思ったそうです。私はそれを聞いてショックというよりも、母の実家はまさに爆心地の近くにあったのですが、もしそこに母がいたら母

永井 薫
NAGAI KAORU

はまず生存していないわけで、そうすれば私も存在することはない。紙一重といいますが、母がその時に実家にいなくてよかったと思いました。

—— 被爆二世ということでは何か生活に支障をきたしたことはありますか

ないですね。ただ、自分の出身地を聞かれたときには、「広島」あるいは「ヒロシマ」を意識します。「広島」と「ヒロシマ」の両方の意味を込めて自分の出身地を言うのです。私としては広島出身であることは、「ヒロシマ」というものも背負っていることだという強い想いがあります。つまり、少し人とは違うアイデンティティを持って生きている。それはむしろ自分にとってはプラスの要因だと考えています。そして自分にそういうルーツがあるからこそ、異文化関係の仕事に携わっているのかもしれない。二世であることを多くの人に伝えなければならぬという使命感の種みたいなのがある中にあるのは、広島出身だからなのかもしれないですね。

平和とは、空気みたいなもの。
普通的时候は何も感じない。

—— 岩佐さんにとって、「平和」とはなんでしょうか

空気みたいなもの。普通的时候は何も感じない。平和ならば森林浴しながら、きれいな空気が吸える。戦争がなければきれいな空気が吸える。戦争・紛争がなければ平和なんだよ。

—— 被爆者への無意識の差別について何か感じるものがありますか

いまだにそんなことあるんだね。娘が結婚するときに、まず相手の男性に、娘が被爆二世であることを知っているのか、大丈夫かと尋ねた。結婚は、2人で力を合わせて家庭を作り、人類が不幸にあわないよう、共に考えていくこと。被爆者側から胸を開いて意思を伝え、接していくという気持ち、それが大切です。相手にもこちらの被爆体験をちゃんと理解してもらわないといけない。やはり、大切なのは被爆者とその二世、三世の家族の手助けです。そして相手に理解を求めようと努力する姿勢です。

—— 最後に、若い世代に向けてメッセージをお聞かせ下さい

いろいろあるからね。昔、座禅の御寺の御坊さんが「君ね、自分を見つめながら生きるということが大切なんですよ」と言ってくたことがある。いろいろな感情の中で、自分を見つめながら生きる。自分のが大変な状況とき、自分一人では生きることができない。そこで、人との交流、共生が大切になってくる。集団の中で自分はどういった役割を果たしていくのかということを考えなければならぬ。人生にはいろいろなチャンスや重要な時期がある。そのチャンスがあるときにうまくそれを生かせるか、チャンスは必ず来るんですよ。それを自分でうまく捕まえるためには、常日頃自分がそのチャンスを活かすためにどういった心構えをしなければならぬか。共生をしていく中で基礎となる自分を大切にしたい。

会なども設けながら、原爆の脅威を知らせることも重要でしょう。

—— 被爆二世ということで、伝えたいメッセージはございますか

とにかく忘れないこと。そういうことがあったということを。今はアメリカと日本が戦争をしたことを知らない人も沢山いますし、こういう世の中なのかなという気はしますね。やはり戦争や平和という話になると一歩退いてしまう人達もいると思いますので、大きく構えるのではなく色々な方面からアプローチがあっても良いと思います。たとえば、福山雅治さんが自分は被爆二世であるとかミシングアウトすると、若い人たちはやはり興味を持つわけですね。歴史が風化していくのは仕方ないことだとは思いますが、それをどのように伝えていくのかという創意工夫は必要かなと思いますね。おそらく福山さんは自分が被爆二世だと言ったことがミシングアウトなどと思っではおられないでしょうし、周りの人やメディアが大げさに取り

上げているだけ。ネット上には、福山さんが独身なのはそのせいじゃないかという意見があり驚きました。あの時、世間の被爆者親族への目とというのはそういうものなのかと思います。知らされました。



—— 永井さんにとって、平和とは何ですか

最近、1ヶ月ほど弟の家族がイギリスに行っていたんです。小学校1年生と4年生の甥と姪にとって初めての海外だったんですね。やはり子どもにとって海外渡航はすごく良い経験だったようです。彼らなりにつらいことも悲しいこともあったでしょうし。英語力も予想以上についてたわけでもないでしょう。でも、ロンドンやパリのような人種のるつぽに飛び込むことで、世界にはさまざまな人たちがいて、多様な価値観があるということを理屈ではなく肌で感じることはできたはず。そんな体験が、いずれ平和とは何かを考える時のヒントになると思いますね。自分が今まで絶対に正しいと思ってきたことも、文化が違えばそうでなくなることもある。それを理解することが平和への第一歩ではないでしょうか。

—— 無意識の差別というものがあります、そういった経験はありますか

それに気がついたのはつい最近です。私の妹も弟も、広島県外の方と結婚しましたが事前に何も問題はおこりませんでした。しかし、2年前からいだったかな、妹の友達は少しづらいい思いをしたようです。広島県外の方との結婚を考えていたのです。その方の実家では、彼女の家系などを調べていたらしいのです。そして、広島出身とわかり、原爆の後遺症などは大丈夫なのか、出産時に子どもに障害が出る恐れはないのか、と言われて少しもめたようです。その話を聞いた妹はすごくショックを受けていました。それを聞いた私も心穏やかではいられませんでした。その時期に、「夕凧も街、桜の国」という映画のチケットをくださった方が、こういった映画のように被爆二世の方たちにも差別があるよね、とおっしゃられていて、そのときにもやはり

り驚きました。実際にこの映画を見て、被爆していない後の世代にも原爆はさまざまな影響を与えていることに思い至りました。

—— 核兵器保有についてどのようにお考えですか

核兵器を無くすということは物理的には難しくないそうです。けどそれをしないのは国と国がけん制し合っているからです。本来あってはならないもののに。子孫にも影響がある。それこそが核兵器の何よりも恐ろしいところだと思います。

—— 我々のような団体の活動をどのような意見をお持ちですか

いろいろな人たち、特に若い人たちがこういった問題を引き継いでいくのはすごく大事なことだと思いますね。実際に被爆者の年齢が上がって、自身の体験を話す機会が減っています。それを二世・三世の人達に引き継いでいくというのは大切なこ

とでしょう。スティープン・リヴァーさんは、これからの原爆記念資料館のあるべき姿は、「来館者たちを怖がらせること」だとおっしゃっていました。今の資料館はなんというか、なるべく来館者を怖がらせないようにしている。歴史的な流れや、今までとこれからの平和の歩み、核兵器に対する知識など、ソフトなところを見せてから実際の被害はどうだったかという、人が怖いと思うところに入っていくのだが、どうもなるべく来館者の恐怖心を取り除こうとしている。しかし現実におこったことは、もっと恐ろしいことだったわけです。その点は包み隠すべきではないし、本当に多数の人が一度に死んでいったという事実を知らせるべきですし、それによって強いショックを与えるくらいでもいいと彼は考えていらっしやるみたいです。私自身、それにはすごく共感します。ただ、ビジュアルだけではなく、被爆者の方のお話を伺う機

——核兵器保有について、どう思われますか

これも国際政治的にいって大変複雑な話で、まず、核兵器が水平的に拡散していますよね。核兵器を持つ国の数が増えていると。最初はアメリカだけだったのが、ソ連、中国にフランスも持つようになり、今や国連の常任理事国5ヶ国が核兵器を持つようになった。そしてこれ以上拡散しないようにということと、NPT(核拡散防止条約)ができたのです。これでとどまるかのように見えたのですが、現実はそのようではない。中東のイスラエル、インド、パキスタン、北朝鮮も持つようになった。そして今の問題は、テロの手段として核兵器、大量破壊兵器が用いられるようになった。これが一番の問題です。そして、核兵器をすでに持っている国が核兵器の質をさらに向上させる、数を増やすという垂直拡散の問題もあります。これについては、アメリカもロシアも核兵器の数を減

らすという条約交渉ができたのである程度減ってはきていますが。

核実験に関する条約はありますが、アメリカはまだそれに加盟していません。NPT条約は、これ以上核兵器の拡散をしない代わりに、すでに持っている国は核軍縮をするというパッケージはできているんですけど



も、核廃絶に向けた動きという点ではなかなか緩慢で進んでいないという批判もあります。これが現状だろうと思いますね。内政が不安定な国のテロリストグループが他の国にいつ使うかわからない、これが大きな懸念になっていますね。アメリカの中にも、もはや核兵器国がそれを所有する根拠というのは、核兵器の抑止論、もしあなたが使えばこちらも使うという恐怖の均衡になっているというのが抑止論ですが、もうそういう時代でなくなっていると。むしろ核兵器について心配しなければならぬのは、核兵器保有国が使用するのではないかと、テロリストが使うという点だろうと。そういう新しい状況を十分踏まえた上で核兵器を減らして行かなければならない。そういう考え方を背景として、オバマさんが主張する核軍縮というのがあるわけです。そういう意味では核兵器を巡る状況も少しずつです

OAFAG

interview 5

広島に生まれ、爆心地から2kmの自宅にて被爆。
現在は国際機構に勤めている、被爆一世。

—— 被爆されたということですが、当時の状況をお聞かせ下さい

僕は被爆一世になるのかね。当時は2歳。まだ幼児ですね。広島市の北の方、今では東区牛田本町となっていますが、そこで被爆をしました。原爆投下についてはもちろん記憶があるわけではなく、後になって姉達から聞いたのです。家の中で、姉に抱かれていたそうです。姉の話によれば数m吹き飛ばされたみたいです。実際にケガをしたというわけではなかったですね。被爆した家があったところは、爆心地から直線距離にして2、3kmの地点ですね。自宅そのものは残っていました。でも後に火事が広がり、夕方頃には家も焼け落ちてしまいました。

母親は原爆で死にました。その日、母と父は市内まで出かけていました。父親は生き残りしましたが、母親は爆風に飛ばされたか何かで死んでしまいました。3人の姉たちのうち1人は田舎に疎開、あと2人は市内にいましたが、1人は学徒動員で助かり、家において私を抱いていた姉も生き残ったので、母親以外の家族はみんな無事でした。

—— 被爆者ということで、結婚などに影響はありましたか

特に女性ですよ。女性が結婚して出産する時には、随分と不安を持っていた可能性はありますね。私の姉たちも、各々に不安を抱えていたみたいですが、幸いにして3人とも結婚して、子どもを産み家庭を持って元気にやっています。私の家族には大きな影響があったわけではないのです。

—— 現在、アメリカのオバマ大統領が核廃絶を訴えています。それについてどう考えますか

当然、核廃絶は人類全体の悲願でしょう。特に日本、そのなかでも広島、長崎と直接に被害を受けた人にとってはなおさらですよ。それをアメリカのオバマ大統領が、それまでアメリカ政府や大統領が核廃絶に対して示してきた態度とは違って、はるかに踏み込んだ対応を表明したというのは大変な勇気だと思います。国際社会もその勇気と先見性を讃えてノーベル平和賞をだしたわけですよ。そこにも核廃絶への世界の期待が強く表れていますよね。



藤原二紀

FUJIWARA NIKI

広島県出身。現在立命館大学4回生。
OAFAGリーダーとして中心となって本書
を作成。趣味はギター。

私は広島生まれ広島育ちの被爆三世です。小学校から高校まで、平和学習の時間に戦争や原爆についてしっかりと勉強をしました。周囲の同じような年代の人たちは原爆について少なからず知識を持っており、それが当たり前だと思っていました。しかし、広島から大学進学のために滋賀に出てきた際に、原爆についてほとんど知らない人がこんなにも多くいることにショックを受けました。これをきっかけに、若い世代にも、もっと原爆のことについて知ってほしい、原爆の被害はまだ続いているのだという事実を知ってほしい、と強く思うようになりました。

音楽が好きで、ギターを弾いているため、広島にいた頃からジョン・レノンやマイケル・ジャクソン（敬称省略）が行っている世界平和や核兵器廃絶のための活動に興味がありました。ジョン・レノンの「Happy Xmas (War is over)」を歌い、「ベット・イン」という平和を訴えるパフォーマンスがありました。マイケル・ジャクソンも「We Are The World」や「Heal The World」などの名曲を書きました。

ジョン・レノンの「Happy Xmas (War is over)」は世界中でクリスマスソングとして大変有名な曲です。副題に「War

is over」とあるように戦争に反対している曲でもありません。私はこの曲の、人種の壁なんて超えてすべての争いをやめようという歌詞にとても感銘を受けました。マイケル・ジャクソンの「We Are The World」にも平和へのメッセージが強く込められています。私は高校1年生の時にこの曲に出会いました。歌詞はもちろんですが、この「We Are The World」という曲名に深く考えさせられました。「僕らは家族なんだ、さあ一緒に住みやすい世界をつくらうよ」という歌詞は本当に素敵だと思います。ぜひみなさんにもこれらの名曲の歌詞を味わって、聴いてみてほしいです。

この2曲の凄いところは、音楽というツールを介して彼らのメッセージが世界中の人々に伝わっているということです。平和を求めどんな活動よりも多くの人々に知られ、大きな影響を与えているのではないのでしょうか。音楽には世界中に平和を伝えられる可能性があります。アーティストとして、また一人の平和活動家としての彼らの行動に、私は大いなる敬意を表したいと思います。



が変化しています。だけど、すぐに廃絶に結びつくかというと、国際政治の現状を考えると簡単にはいかないでしょうね。核兵器はいまだに存在し、戦争が終わって65年、広島、長崎を最後に核兵器は使われていないが、核兵器が大変な不幸をもたらすという意識はずっと変わらなideでしょう。広島、長崎に対する責任と捉えていいでしょうね。

「平和」とは何でしょうか

「戦争のない世の中が平和」だという定義も成り立つかもしれませんが。ただ戦争さえなければ世の中が平和と言えるかというと、そうではなくて、もっと積極的な意味が平和にはないといけないですね。それは、100人が100人幸福に暮らせる国は天国のようではないんですけれども、全員ではなくても、やはりその社会に暮らす大多数の人が、物質的にも、精神的にもある程度満たされた生活が送れるような国や地域が必要。そういう意味ではもちろんある程度豊かでないといけない。貧富の格差や所得格差が大きいとそういう条件は満たされませんから、ある程度社会の中に豊かさがあると、

共産主義的な平等社会ではなく、公平さがあること、そういうたものが満たされる社会であること、そしてその社会が全体として大きな目的を持つこと。その目的に導かれてその社会が安定し、繁栄する。そういうのが僕のイメージする平和です。単に戦争がないというだけではなくて、それ以上に、もう少し積極的な意味があった上での平和が存在してほしいです。

「戦争がなければ平和？
平和には、もっと積極的な意味がほしいんだ。」

発起人についてのお願い

本プロジェクトが世界中の今を生きる人々、また後世に原子爆弾や核兵器の恐ろしさを伝え、未来での核兵器の使用を防ぐためには、有識者や著名人の皆様による発起人としてのご協力が大きな力となります。

1. 本プロジェクトを世の中に紹介していくなかで、発起人としてお名前を紹介させていただきます。
2. 主たる目的は助言やサポートをして頂くことであり、金銭的援助をお願いするわけではありません。
3. 本プロジェクトがなんらかのトラブルなどにより遂行出来なかった場合、金銭面を含めた一切の責任が皆様に課せられることはございません。
4. 本プロジェクトから、発起人会に入会頂ける方や協賛して頂ける企業のご紹介いただけるお力添えをお願いする場合がございます。
5. 発起人会の方々をお呼びしての定例会はございません。代わりに本プロジェクトから月1回の報告メールをお送りさせていただきます。

ご協力いただける方は下記までお問い合わせいただくようお願いいたします。

連絡先: info@oafag.com

HP : <http://www.oafag.com/>

なお、電子書籍の配信・プロジェクトの進行状況などはHPにて随時行っていきます。

あとがき

私たちOAFAG（One Awareness For All Generation）は今このプロジェクトを進めています。
この本を一人でも多くの人々に読んでいただけるよう、ご協力いただけると幸いです。

OAFAGプロジェクト

概要

このプロジェクトに賛同していただける人々、協賛企業からの寄付金をベースに、電子ブックを作成してウェブ上で配信します。コンテンツは、被爆二世、三世にフォーカスしたインタビューを集めたものが中心となります。そのほかコラムなどを掲載し、全3部作を配信する予定です。
電子ブックの完成後は書籍として印刷し、関係省庁などを通じて、全国の高等学校、大学、市役所、公共図書館に配布します。翻訳も進め世界各国の学生たちの手元に届けます。
また、賛同してくださるアーティストの皆様をお呼びしてのチャリティコンサートの開催、本プロジェクトメンバーが書籍と共に世界各国の大学等を回り、自分たちの思いを伝えるなど、さまざまな活動を予定しています。

目的

原子爆弾投下、戦争による被害は終わっているものではありません。実際の被爆者や二、三世の生の声を外に向けて発信することによって、今もなお被害に苦しんでいる人々が多数いることを広く知っていただき、戦争や核兵器使用の恐ろしさを伝えていきます。ひとりひとりが平和の尊さを再確認することで、未来の戦争や核兵器の使用を防いでいく一助となることを目指します。

「 OAFAG vo.1 」

著者：OAFAG

藤原二紀

竹本亘輝

鈴木美和

十河佑治

畝田麻未

森いちご

南里京太郎

逢坂恵里奈

南部義浩

大森芙希

星加碧

北村瑞希

辻本剛士

制作：OAFAG